様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　6 月　3 日現在

機関番号：32693
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：平成 19 年～平成 22 年
課題番号：19390564
研究課題名（和文）　小児看護におけるケアリングと癒しの環境創造
—アクション・リサーチを用いて—
研究課題名（英文）　Creating the Carative Environment in the Child and Family Care

研究代表者　筒井　真優美(TSUTSUI MAYUMI)
日本赤十字看護大学　看護学部（教授）

研究者番号：50236915

研究成果の概要（和文）：本研究は、平成 19 年度-平成 22 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B））「小児看護におけるケアリングと癒しの創造—アクション・リサーチを用いて—」（課題番号 19390564）として４年間にわたり、子どもが入院している病棟や通院している外来において、アクション・リサーチを用いてケアリングと癒しの環境を創造することを目的として、実施された。
（1）文献検討および事例検討（2）フィールドワーク（3）アクション・リサーチの実施という 3 つの過程を経て、小児看護において子ども・家族・看護師にどのようなケアリングと癒しの環境を創造するに至ったかについて明らかにし、それらの過程をもとに理論的解釈により統合させる試みを行った。
質的および量的データ収集を通して各フィールドでのアクションリサーチプロセスを記述し、アクションリサーチによって生み出されたケアリング環境、また、それを促したきっかけ（要因）について Watson のケアリング理論に基づき分析を行った結果、①ケアリング環境を促したきっかけ②ケアリング環境の創造という 2 つの事柄が明らかとなった。
まず、看護師が実践の中で着目した気がかりな事に関して、仲間と話し合うことや、気がかりな事に関する具体的な対策の提案などが、ケアリング環境を促したきっかけとなっていた。
さらに、きっかけをもとに、臨床で看護師が気がかりに思っていた事が改善される方向に向かっていった。つまり気がかりな事を発端に臨床において子ども・家族・看護師それぞれにとってのケアリング環境を生み出すことに繋がっていたことが明らかにされた。
今回の４年間に及ぶ研究活動によって、ケア因子が促されることでケアリング環境をもたらすことが明らかにされたことから、今後、人と人が織りなす様々な医療現場において、ケアを受ける者のみならずケアを提供する者へのケアリング環境の構築が期待できるものと思われる。
研究成果の概要（英文）：**Purpose**　The purpose of this research was to identify co-creation of carative environment at medical facilities to enhance child, family and clinical staff care.
Methods　Participatory action research was conducted from 2007 to 2010.　The creation of and facilitating factors of carative environment due to action research were analyzed. The entire research process was supervised by nurse researchers specialized in action research.
Results　**(1)Facilitating Clues**　The clues to facilitate carative environment were: the seminar regarding concerns what nurses had, informal talk with others about concerns what they had, feedback of the attitude change to nurses who were committed in, and giving the advice on nursing strategies.　These clues triggered the opportunity for nurses to gain new knowledge, to share the knowledge, to understand their situation, to disclose their feeling and thoughts, and to realize that the others felt and thought in the same way.**(2)Creation of the Carative Environment**　The concerning situations identified in the fields were improved rather than dissolved. Distress and loss of

desired to work in nurses turned to the confidence in oneself and nursing care, which might invite the assurance of child and family care in advance.

Discussion The result showed the concerns in the field were just the starting point to create the carative environment. The process of creation of carative environment in this study reflects some of the Carative Factors in Watson's Caring Theory. The study showed the facilitating Carative factors were the powerful change agent in the hospital to enhance child, family, and staff care.

交付決定額 （金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
19 年度	1,500,000 円	450,000 円	1,950,000 円
20 年度	2,400,000 円	720,000 円	3,120,000 円
21 年度	1,400,000 円	420,000 円	1,820,000 円
22 年度	2,700,000 円	810,000 円	3,510,000 円
総　計	8,000,000 円	2,400,000 円	10,400,000 円

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：小児看護、ケアリング、癒し、アクション・リサーチ

１．研究開始当初の背景

医療技術の発達により疾病構造は重症化や複雑化している一方で、医療者の人員不足や在院日数の短縮などにより医療環境は悪化している。その中で、子どもとかかわる看護師は、治療で苦しむ子どもや虐待を受けた子ども、子どもの死などに接して心的外傷体験をしている。

平成 14 年-17 年度に行った研究「小児看護における臨床判断と技のモデル構築」で、小児看護領域のエキスパートナースの倫理的感受性、子どもや家族へのケアに効果をもたらした看護師の臨床判断と関わり、家族や医療職者を動かし子どものケアに影響を与える看護師の技が明らかにされた。しかし、エキスパートナースであっても人間関係や病棟のシステムが壁となり、持っている技を発揮できない状況がある場合もあり、子どもの最善の利益を守ることが難しい現状が明らかにされた。

以上のことから、子どもと家族へより良い看護を提供するために、子どもと家族への看護を阻んでいる状況を明らかにし、困難な状況をどのようにして変革させていくことが可能なのか、その手立てを構築する必要がある。

２．研究の目的

子どもが入院している病棟や通院している外来において、アクション・リサーチを用いてケアリングと癒しの環境を創造する。

３．研究の方法

本研究は、平成 19 年度-平成 22 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（Ｂ））「小児看護におけるケアリングと癒しの創造―アクション・リサーチを用いて―」（課題番号 19390564）として４年間にわたり、次の 4 つの過程を経て実施された。

(1) 文献検討および事例検討
(2) フィールドワーク
(3) アクション・リサーチの実施
(4) ケアリングと癒しの環境創造についての統合

４．研究成果

(1) 文献検討および事例検討

アクション・リサーチを予定している研究協力施設における課題を明確化する前段階として、子どもと家族の看護を阻んでいる現象や状況を文献検討と事例検討で明らかにした。

(2) フィールドワーク

米国 Colorado 州にある Colorado Children’s Hospital などの視察や、Watson,J 氏らとのケアリング理論に関する討議を通して、ケアリング理論に基づいた看護実践について理解を深めた。

(3) アクション・リサーチの実施

文献検討および事例検討で得られた結果を基に、研究協力が得られた病棟や外来において子どもと家族への看護を阻む状況における課題を明確化した。そして、状況を変革させるアクション・リサーチを実施し、変革してゆくプロセスを明らかにした。

(4) ケアリングと癒しの環境創造についての統合

上記 (1) ～ (3) までの過程をもとに、小児看護において子ども・家族・看護師にどのようなケアリングと癒しの環境を創造するに至ったかについて、理論的解釈により統合させる試みを行った。

その方法として、質的および量的データ収集を通して各フィールドでのアクションリサーチプロセスを記述し、アクションリサー

チによって生み出されたケアリング環境、また、それを促したきっかけ（要因）についてWatson のケアリング理論に基づき分析を行った。

分析の結果、次の事柄が明らかにされた。

①ケアリング環境を促したきっかけ

まず、看護師が実践のなかで気がかりな事に着目することから全てが始まっていた。その気がかりな事を発端に、それに関する文献資料を用いた勉強会や、気がかりな事を仲間と話し合うこと、気がかりな事を当事者へフィードバックすること、気がかりな事に関する具体的な対策の提案などが、ケアリング環境を促したきっかけ（要因）となっていた。

これらのきっかけによって、ケアの質を高めるための知識を得たり、知識を仲間と共有することが出来たり、自分達が置かれている現状を捉えることが出来たり、考えや気持ちを仲間に吐露することが出来たり、仲間との繋がりを実感したりする機会となっていたことが明らかにされた。

②ケアリング環境の創造

きっかけをもとに、臨床で看護師が気がかりに思っていた事が改善される方向に向かっていった。それは気がかりの解消というよりはむしろ、子ども・家族・看護師が置かれている状況の向上をもたらし、看護師のケアに対する自信とケアへの意欲が沸く状況をもたらしていた。つまり、気がかりな事を発端に臨床において子ども・家族・看護師それぞれにとってのケアリング環境を生み出すことに繋がっていたことが明らかにされた。

これらのケアリグ環境創造プロセスをみてみると、Watson のケアリング理論のケア因子である、人間主義的－利他的な価値観の形成、自己および他者に対する感受性の育成、援助－信頼関係の発展、肯定的感情と否定的感情表出の促進と受容といったものが働いていたことが分かる。

今回の４年間に及ぶ研究活動によって、ケア因子が促されることでケアリング環境をもたらすことが明らかにされたことから、今後、人と人が織りなす様々な医療現場において、ケアを受ける者のみならずケアを提供する者へのケアリング環境の構築が期待できるものと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

尾高大輔・川名るり（3 番目）・江本リナ（4 番目）・筒井真優美（6 番目）・他 4 名（2011）．子どもや家族の言動による傷つき体験を看護師が語ることに対するアクションリサーチ．（投稿中）

岩﨑美和・江本リナ（6 番目）・川名るり（7 番目）・筒井真優美（8 番目）・他 6 名（2011）．子どもの泣きに対する看護師の意識とケアの変化－2 つの小児専門の病棟におけるアクションリサーチ－.投稿中）

伊藤久美・江本リナ（4 番目）・川名るり（6 番目）・筒井真優美（7 番目）・他 6 名（2011）．ペルテス病の子どもへ『見通しのつく説明』をおこなうことによる医療者の変化－アクションリサーチを通して－．（投稿中）

太田有美・川名るり・江本リナ（6 番目）・筒井真優美（8 番目）・他 6 名（2011）．子どもと大人の混合病棟にいる看護師の遊びに対する意識とケアの変化をおこすアクションリサーチ．日本小児看護学会誌，20（1），78－85.

甲斐恭子・筒井真優美（3 番目）・江本リナ（6 番目）・川名るり（7 番目）・他 7 名（2011）．重症心身障害児者とその家族への外来看護師のかかわり―アクションリサーチを通して―．日本小児看護学会誌，20（1），70－77.

江本リナ・川名るり・筒井真優美(4 番目)・他 3 名（2010）． アメリカの小児病棟の視察報告(3)ケアリングのある環境－New York University Medical Center訪問より－．小児看護，33（2），247-251.

平山恵子・川名るり・江本リナ・筒井真優美・他 2 名（2010）．アメリカの小児病棟の視察報告（2）　子どもと家族に、やさしさと専門的技術と刷新を伴ったケアの提供－Presbyterian/St.Luke’s　Medical Center訪問より－．小児看護，33（1），131-135.

西田志穂・江本リナ（7 番目）・筒井真優美（8 番目）・他 8 名（2010）．看護師が

「困った」事例の検討をとおしてみえる小児看護実践を阻む臨床の現状．小児看護，33（11），1587-1593.

深谷基裕・筒井真優美（6番目）・江本リナ（9番目）・川名るり（11番目）・他8名（2010）．小児看護に関するケースレビュー後のケース提供者による臨床へのフィードバック．日本小児看護学会誌，19(2)，25-31.

伊藤孝子・江本リナ（6番目）・筒井真優美（7番目）・川名るり（12番目）・他9名（2010）．小児看護のケースレビューがケース提供者に及ぼした影響．日本小児看護学会誌，19（1），50-56.

川名るり・江本リナ・筒井真優美（4番目）・他3名（2009）．アメリカの小児病棟の視察報告（1）ケアリング理論の実践導入ーThe Children's Hospital訪問よりー．小児看護，32（13），1816-1821.

長谷川孝音・江本リナ・筒井真優美（9番目）・他8名（2009）．入院している子どもが脅かされている事とその援助に関する文献検討．日本小児看護学会誌，18（2），29-35.

西村実希子・筒井真優美（4番目）・江本リナ（8番目）・他8名（2009）．小児看護領域における看護師のスキルや力を阻む状況に関する文献検討．日本小児看護学会誌，18（2），36-42.

山内朋子・筒井真優美・江本リナ（8番目）・他8名（2009）．小児看護領域で働く看護師のストレスや感情に関する文献検討．日本小児看護学会誌，18（1），127-134.

中澤淳子・江本リナ（4番目）・筒井真優美（9番目）・他8名（2009）．小児看護における家族のニーズとその援助に関する文献検討．日本小児看護学会誌，18(1)，120-126.

松尾美智子・筒井真優美・江本リナ（8番目）・他8名（2009）．入院する子どもを取り巻く環境に関する文献検討．日本小児看護学会誌，18（1），112-119.

〔学会発表〕（計18件）

甲斐恭子・筒井真優美（3番目）・江本リナ（7番目）・川名るり（8番目）・他7名（2010）．重症心身障害者とその家族への外来看護師のかかわりーアクションリサーチを通してー．第30回日本看護科学学会学術集会講演集，266．2010年12月3日（札幌）．

長田暁子・江本リナ・川名るり（4番目）・筒井真優美（6番目）・他5名（2010）．NICUで在宅医療が必要なケースに対する退院調整を行う看護師の困難感に関するアクションリサーチ．第30回日本看護科学学会学術集会講演集，266．2010年12月3日（札幌）．

太田有美・川名るり・江本リナ（6番目）・筒井真優美（8番目）・他6名（2010）．子どもと大人の混合病棟にいる看護師の遊びに対する意識とケアの変化をおこすアクションリサーチ．第30回日本看護科学学会学術集会講演集，267．2010年12月3日（札幌）．

岩﨑美和・江本リナ（6番目）・川名るり（7番目）・筒井真優美（8番目）・他6名（2010）．子どもの泣きに対する看護師の意識とケアの変化ーアクションリサーチの手法を用いてー．第30回日本看護科学学会学術集会講演集，267．2010年12月3日（札幌）．

尾高大輔・川名るり（3番目）・江本リナ（4番目）・筒井真優美（6番目）・他4名（2010）．子どもや家族の言動による傷つき体験を看護師が語ることに対するアクションリサーチ．第20回小児看護学会

学術集会講演集，99．2010年6月26日（神戸）．

伊藤久美・江本リナ（3番目）・川名るり（6番目）・筒井真優美（7番目）・他6名（2010）．ペルテス病の子どもへ『見通しのつく説明』をおこなうことによる医療者の変化ーアクションリサーチを通してー．第20回小児看護学会学術集会講演集，159．2010年6月27日（神戸）．

深谷基裕・筒井真優美（6番目）・江本リナ（9番目）・川名るり（12番目）・他9名（2009）．小児看護に関するケースレビュー後のケース提供者による臨床へのフィードバック．第19回小児看護学会学術集会講演集，99．2009年7月18日（札幌）．

伊藤孝子・江本リナ（6番目）・筒井真優美（7番目）・川名るり（12番目）・他9名（2009）．子どもと家族の看護に関するケースレビューがケース提供者にもたらしたもの．第19回小児看護学会学術集会講演集，98．2009年7月18日（札幌）．

Emoto,R.,Kawana,R.,&Tsutsui,M.,et al.,（2009）.Caring Environment to Enhance Child and Family Nursing.The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science program & Abstracts, 227.September 19.（Kobe, Japan）

西田志穂・江本リナ（6番目）・筒井真優美（7番目）・他7名（2008）．看護師が「困った」と感じた子どもと家族の事例にみる看護を阻む現象や状況．第28回日本看護科学学会学術集会講演集，304．2008年12月14日（福岡）．

筒井真優美（2008）．日本における子どもと家族の看護の現状と課題．Japanese Medical Support Network主催意見交換会．2008年8月12日（New York）．

山内朋子・筒井真優美・江本リナ（8番目）・他8名．小児看護領域で働く看護師のストレスや感情に関する文献検討．日本小児看護学会第18回学術集会講演集，249．2008年7月27日（名古屋）．

松尾美智子・筒井真優美（3番目）・江本リナ（8番目）・他8名．子どもの療養環境に関する文献検討．日本小児看護学会第18回学術集会講演集，232．2008年7月27日（名古屋）．

中澤淳子・江本リナ（4番目）・筒井真優美（9番目）・他8名．小児看護における家族のニーズとその援助に関する文献検討．日本小児看護学会第18回学術集会講演集，198．2008年7月26日（名古屋）．

長谷川孝音・江本リナ・筒井真優美（9番目）・他8名．入院している子どものニーズとその援助に関する文献検討．日本小児看護学会第18回学術集会講演集，186．2008年7月26日（名古屋）．

西村実希子・筒井真優美（4番目）・江本リナ（8番目）・他8名．小児看護領域における看護師のスキルや力を阻む状況に関する文献検討．日本小児看護学会第18回学術集会講演集，185．2008年7月26日（名古屋）．

６．研究組織（平成23年3月末現在）

(1)研究代表者

筒井　真優美(TSUTSUI MAYUMI)

日本赤十字看護大学看護学部（教授）

研究者番号：50236915

(2)研究分担者

江本　リナ(EMOTO RINA)

日本赤十字看護大学　看護学部（准教授）

研究者番号：80279728

川名　るり(KAWANA RURI)

日本赤十字看護大学　看護学部（准教授）

研究者番号：70265726
平山　恵子(HIRAYAMA KEIKO)
日本赤十字看護大学　看護学部
（　助手　）
研究者番号：40520771
山内　朋子(YAMAUCHI TOMOKO)
日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
研究者番号：70460102
松尾　美智子(MATSUO MICHIKO)
元日本赤十字看護大学　看護学部
（　助手　）
研究者番号：90460104
松本　紗織(MATSUMOTO SAORI)
日本赤十字看護大学　看護学部
（　助手　）
研究者番号：50591624
飯村　直子（IIMURA NAOKO)
首都大学東京健康福祉学部看護学科
（　教授　）
研究者番号：80277889
西田　志穂(NISHIDA SHIHO)
日本看護協会看護研修学校　認定看護師教育課程　小児救急看護学科　専任教員
研究者番号：60409802
(3)連携研究者
アクション・リサーチ研究協力者
伊藤　久美(ITO KUMI)
昭和大学藤が丘病院　病棟看護師長
岩﨑美和(IWASAKI MIWA)
東京大学医学部附属病院　小児看護専門看護師
太田有美(OTA ARIMI)
名古屋第二赤十字病院　小児看護専門看護師
長田暁子(OSADA AKIKO)
横浜市立大学附属市民総合医療センター　小児看護専門看護師　病棟看護師長
尾高大輔(ODAKA DAISUKE)
武蔵野赤十字病院　看護師
甲斐恭子(KAI KYOKO)
神奈川県立こども医療センター　小児看護専門看護師
研究協力者：
Jean Watson　University of Colorado Denver
草柳浩子　武蔵野大学看護学部准教授
佐藤朝美　日本赤十字看護大学大学院博後期課程
深谷基裕　日本赤十字看護大学大学院博士後期課程
西田志穂　日本看護協会看護研修学校認定看護師教育課程　小児救急看護学専任教員
伊藤孝子　北里大学病院
中村明子　杏林大学保健学部看護学科助教
岩尾弓子　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
金丸美穂　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
後藤淳子　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
鶴巻香奈子　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
飯村直子　首都大学東京健康福祉学部看護学科　教授
朝倉美奈子　日本赤十字社医療センター
下道知世乃　海老名総合病院
中澤淳子　聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院
西村実希子　慶應義塾大学病院
長谷川孝音　神奈川県大和市こども部こども総務課
相澤麻衣　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
仁宮真紀　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
間所利恵　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程
山内朋子　日本赤十字看護大学大学院博士前期課程